

# エンジニアパーク

# Engineer *Ring* Park



**富樫 巖 森林部門（林産） 勤務先：(独)国立高専機構 旭川工業高等専門学校  
物質化学工学科 TEL(0166)55-8040（直通） FAX(0166)55-8082**

「技術士ビジョン21」による職業別位置づけに従いますと、『教育・研究者としての技術士』です。縁あって、2005年（平成17年）4月から上記の勤務先にお世話になっています。それ以前は、道立試験研究機関に勤務する『公務員技術者としての技術士』でした。

技術士資格を得るには、まずは文章を書ける能力を養うことがスタートであったと感じています。単純計算ですが、筆記試験において午前に配布される原稿用紙4,000字分を3時間で埋めるには2.7秒で1字、午後原稿用紙8,000字分を4時間で埋めるには1.8秒で1字の速さが必要です。技術士とは、猛スピード文章を書ける者とのイメージが頭に焼きつきました。実際、当時の本業においても上司の判断を仰ぐための決定書と呼ばれる各種催しの企画書を書くのがノルマでした。

ところが、一転して学生に向かって講義するのが本業となりました。毎週、同じ顧客を前にして（板書もしますが）お喋りをしなければなりません。『技術士求む』の一般公募で教員になったことから、技術士は連載的小話をするのも任務と感じ、ひたすら授業の準備に励みました。一を聞いて十を知りたくなる学生が目の前に並んでいるはずと思い込み、授業では時間の許す限り技術的なキーワードを多数紹介・解説しました。

しかし、学生にとっては退屈で難解な講義をしてしまったようです。定期試験の解答用紙や回収したレポートの中身を読んで、自戒の念に駆られました。学生が興味を覚える前に沢山の知識や情報を提供することは、おなかを空く前に料理を並べることに等しいようです。『教育・研究者としての技術士』とは、学生の知的な（食）欲を引き出すのが最重要任務なのかも知れません。では、どうすればそのタスクを達成できるか？ 課題は難解です。

次号は、浅野行蔵さん(生物工学/総合技術監理部門)



**上野 一郎 農業部門（農業・蚕糸）**

**勤務先：洞爺湖町農業研修センター**

私が勤務している洞爺湖町農業研修センターは、都市と農村との交流や農業技術試験・研究に関することを柱に運営されています。都市と農村との交流では、市民農園と呼ばれる貸農園70区画と、体験ハウスとしてのガラス温室があります。市民農園は札幌や室蘭、近郊の町からの利用者が多く、土日を中心に自然や土とのふれあいを楽しまれているようです。初めて家庭菜園を体験される方のために、5・6月は栽培相談員もつきます。ガラス温室では、協和のハイポニカによる水耕栽培を行っています。二十数年前、トマトが一株から一万二千個収穫できるということが雑誌に載りましたが、まさに同様のものです。季節的な制約を受けるので、こちらでは六千個を目標に栽培しております。丁度ブドウ棚の様にトマトの実がなり、その下をくぐりながら見学できます。夏休み時期には多くの子供達が、水の中に広がるトマトの根を観察したり、トマトのもぎ取り体験をしています。試験・研究の部分では、有機栽培や特別栽培の試験を実施してきました。今や安全・安心・おいしいは当然のこととなってきており、その中で有機質肥料の活用が重要になってきています。そこで、どのような有機質肥料をどのように使えば、より効果的かを試してきました。今後については、農薬のポジティブリスト制度に注目しています。これまで以上の厳しい規制であるので、作物の栽培条件により農薬の残留に違いがあるかをみて、地域の生産者への指導に役立てたいと思っています。

次号は、富田義昭さん（農業部門）